

哀歎抄（十三）

尾崎 文英ぶん えい

憂愁の夢二のをみな帯垂れて茫とあかるき萌えの伊香保路

―前橋文学館

じぼ・あん・じゃん！時計の音をうたひたる大朔太郎ギターがのこる

朔太郎自身が朗読^よめる詩がうつる「乃木坂倶楽部」こころどよもす

段抜きに少年が跳ぶきだはしよ百日紅の天蟬声涌いて

真清水のきよらけくある峡の道蟬声いつに生の世にあり



フェルメール絵画のちから心うつ上野の森にしばし蟬声

耳飾り付けし少女が振り向いて彼方に居たり周りは暗く

波かかる汐吹岩に近寄れば手石島見ゆ潮がとどろく

―清澄寺

われと娘が師弟となりて山下る秋冷の風身に染みてくる

モダンダンスOTOをテーマに生まれり津波の後に不安と予感

凜として女人の画像かかりある湯の香耀ふ廊に佇む

―浅野晃先生

大切に持ちて来たりし卒塔婆を重ねて建てぬ面影の師に

（『日本短歌協会会員』）

